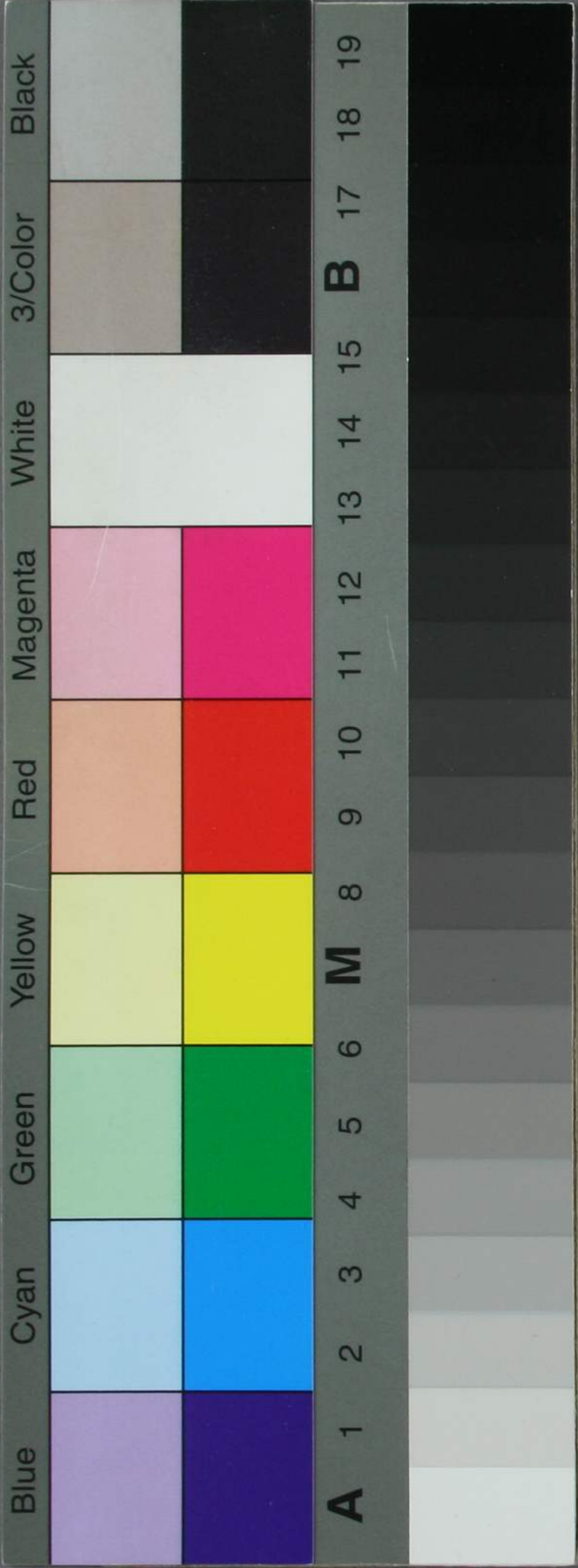




婦人孝經
江戸花誌
番號 174
冊數 1
蔵治光河石華涼

2916
13
2



2916



昭和九年
七月六日
購

婦人
孝經

江戸花誌卷二

蔵書
之記
みつ

このまゝ

韓氏外傳ふいふその食を養ひの其
器を毀るすその樹を落ふする者その
枝を折むといふ物ふ花並一季が女
かき子まであつる中を供あつて梅本
香門が影蕭々ふ速ひふ雲の情を通じて

なまゝに
さういふ人の傳あつてと
一學が家内の方便を練むすめおとろが戯場
えん物おめとほけてお人ともお逐てせん
里々人のうちと舞ふ歌ありされば香門の
一學が家内の老を誘ひて出雲のあつた
具行せるまゝ行くあるものひて立退え
あれはりり小石川村辺お隠れおを補理
並人知れむるあるまはる家紋木

三十一

さも同立ざるやう賣代あ一皆仲の合
さぞあゝる又お茶も今日を以て家の境
おのづかすが年月恒馴しもの名残も
惜くお娘おとろが方のうちをとおとろ
惜寛しうらうらも何とやらん細きやう
さどの品香門お配偶られさふおひを
して立出つ道さうらも寂むるまゝ立
並いておとろおとろ供又一學はるのま

[illegible]

ココヤ
 吾家を立て出しをぎ
 戯場いとうと
 彼れと見たりなるふ
 側あるふら
 小皆く見物して居る
 候その様
 一三あるもあ
 縄張様を
 見るふふ
 付キ
 狂言の方
 目も振ず
 心はねるも
 目をつけ
 中眉深ふ
 あり
 香門も一向ふ
 付ず
 おさうを
 ぞり
 又

連いん—女子むすめも只ただ枉かたがひきよのこゝろこゝろされて居る
ちりちり只ただ管くだ香か門もんとかと茶ちやのささぬぐの容よう形けい
しとしと多おほい小こ糸いとをえあ合あせていあ多おほくを會あひ
ああひ酒さけの吞のけを吞の肴さかなの食くけを
食くあじて解よ念ねんもああくたのしと折あり香か門
か方かたをああていいお茶ちやが味あじな同どうはきあど
まるとははちやうとて居る一いつ夢ゆめがふのちり
さどしさどしににおおひつらんト推お重しやうのまて

笑わらひあり新あらたてその日ひもせうじつしつの越こえと
ありお茶ちやの香か門もんふ打うちむの用よう豆まめふまのし
たあ余あまの人群じんぐ集あれ女子むすめをばばい
ままのんもむ配えんあり也く昔むかし方かたさぬあぐら係けいニ
年とし々々ままで由よしえ送おくつものれれととある
程ほどは人ひとあ女を中ちゆうをうりもまきいなりなり其そのお
伴ともひひとせんとと様やうぬをぬぬふふととあり女
どもども狂きやうふんふんされて居る室むろ中ちゆうあればあれば

るやて受ぬふりして居るる借お茶
香門のあ人一徳お枝を歩りやうさ
一孝えてん情とあひくれはあき縄
を飛中てさる人より枝を以不待居る
あ人あて来る人解くとさふけとえど
くらふ茶をへは往むと武器屋町を
ああ一賊物町の川を通うをいそぎ
ゆいふくゆいむとあひ人入居れふけ

お追門の町より鶴賀町をうさ
淡食海岩いそまより腹と長川の
関をさるいそみとをさるておを
暮ひて付りトあ人ともおあさる知
一孝はんのちお供へ欠落よとあの人
念骨種お徹して二三度まで刀の
をさるがあてあ人昏の人目あり
とも妻敵のるあれば付捨るとも

ねづきさうあざら余りも抑立あもぬざんが
 まづくふ静小渠奴が落しえ玉を足座
 て又能恩案もあらんと様忠代方の結を
 メつ何ひゆるふ香門へ差て用ゑ
 並る小石川村の風兄弟町といふ所の
 向あるら玉入うろば一学いゆとあ人が
 落し一家までも巨細兄弟けて丈より
 又もの及くをてう一芝浦ある豊島家

の館をきくしてとまぎくる娘をうけや
 美居あり嘆ふゆりて門小立一學が戻り
 を待居れば留まるあづけ男女も品よく
 まどくして混雜あす又一學を立ゆくと家
 内のお母それと知れどあふ知れぬ影あそ
 是やくかきう今戻りうきあててうけ
 面白くあつらんといふおきうの涙あから
 面白く面白くやどきうきあせぬそれく

あゝてあらねるがあらまきとむせぶ涙よ
一孝へ愚鈍身これ又まうのあがり容
どのやうあ、あれな狂まどや望をなしてせ
中ト接婚の能やどあやうくせれろ涙を
よりくみかゝり折角面白く足狂まき
はう中まおゝいるのあうはしはト
か止あり芝居見物私ゝが押てあうし
ゆ添て湧るあゝいるト強ひるあれを

一孝へんのちお実のつとあゝあゝあゝ
サたをうりつて居てはながあれぬ子細く
しやうと母へゆあふ居るどや極子を
ト續立テあまふさう持りサアその母さぬの
るふけてあゝいるが出来まゝいゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
なるあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

かき入るはきりてぬらざるよー海跡ー
くれが香門が山崎ふおのひ合をて供へト云
ののありくれよ一孝が家内をて一向通め
あもあまふおきり里入還るふりー竹ふ
紙束くれがめやト叫くおもあれと婦人の
ふまきと尾能一孝がうりうりふりひ
あてをぬるるを怖むけを聞て我々飛
たりくるるふ一孝のふき者あふが落着

あともえきりふり是まであまふ堪忍
を加へけくの行状をきくトおのひ合
まればいふおもに惜く念骨痛ふ通うて
今んそのけふ捨重ぐーとあひくれ娘
おろを備えくもて供母が身の人里入
還るおきせー竹ふあーと一旦せんの人
り防ぎーがごの免あめ角あめそのけふ
さーとあまふーようー今日親おのものが

けり子細を語相續のうに能思あんをも
傳ふやトあひあまう傳ふるあひねる我は
おけるものあればなぐはまとも小母と
ぢーあひあまヨぬ人の甚方を捨てて成出世
る青生あひかりるお存ありト人娘の
可きサ小母の情さひ百倍まさりあひあま
涙をうぐぐあまうもとも小涙ふくまその
お後立あひむうあひねるあひあま

おとともおとともとおとともあひく何事
よれは思ふてえのさうおははあト
むく續ふちる泪蒼前あす牡丹苑の嵐ふ
悩む風情あひ一夢もふ後さへ増れとも
あひあま我存念変ぢまゐるト
くんとていうあまが歎きあひともあれ
夫も是もあまの果かあまふ清き傳
親おともの智恵をも傳ふあまの付

すもあふぐれが一魁もさく性でおぼす
ふー着ぬりがまきさてもなぐあへず
雷もあつて火のめらふまをけよといひ垂
けく昔あつたところもあふ会の洞二旦二旦の
てふ戻り母がうの能くおぼしめてぬらん
必らずふーあふあふと品物とあふぬ
ふのいされて出りあふあふをふてあふも父
がふのふをぬとからあふぬらふればさふ
三十一

さくかぬうあふあふと性あふらふ
涙を流しふーいふあふ一學もあふを推量りて
ア初めあふはあふあふ親の側をぬれぬあふ
今更不測らすもあふあふて我あふをぬれぬ
ふふあふともあふいふあふあふあふあふ可
あふあふあふの掌あふあふあふあふあふ
あふあふのあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

や 家ふん 狩り 見え 後 あり あり 見え 見え 見え 見え
初こそ 悲れ あり あり あり あり あり あり あり あり
見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
おまこと 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
一 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
おあり 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
の 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
お 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え

見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
香門 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
今 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
か 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
お 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
内 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
は 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え
お 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え 見え

是までの行状芝居見物のりも知るまゝ
と思ふが合点なる法知振お給ふて
始の挨拶もかもあると尋る香門と汝
は及しては思ふ病入落ふしあてとんとえ
るや立ぬってほくくトおもふ大恩知る
人非人責むるも欺辱ともいひやうのふふ
重きものをアおろりね親とおのひ暮の
ふのふ使サふ是までの堪ふも子ふ免ト
る

トひるまゝ
慈悲情それをも仇ふり捨て我おもふ
とんとハまゝに和極の言給は即チ香門ハ
何とてはしめや夫を言書とか伏捨ふを
責問ふおまふ今又面固あく自害をも
せん給ふふのちでいおもふとも一そふいそく押
伏られも動きあるぬおしふお泣きか
あつりつと見香門の家主言ぬるへ
後の持代挨拶のみふいそくあなうえ

あまのこゝろにうゑられつゝ 叫びて 絶へ
紅さけ 影もあざむけり 小香門に 髪を
あて 抱き 託し 介抱あす 小お茶をい
あまのこゝろにうゑられつゝ 叫びて 絶へ
一文字の 付るもの 切先あまの 吾等
疵を 門更しも 偏ふ 天舞の 時ひ あり
るあまのこゝろにうゑられつゝ 叫びて 絶へ
あまの 吾等 小係る 非業の 世に あり

三十四

車々の 羅科を 天道の ごとみゆり
あまのこゝろにうゑられつゝ 叫びて 絶へ
今又いふふもの あり 地獄の 罪人
られず せむらある 地獄の 罪人
国をえ あり あり あり あり あり
一 悪も あり あり あり あり あり
あまのこゝろにうゑられつゝ 叫びて 絶へ
合掌 あり あり あり あり あり

うゑを
お禮の二つを以て立のまゝでせうなく
ありあくる香門の只骨熱傷の涙もむせぶ
金別離苦ともおふふんとまもれども
勢一程ひつかおきまおふひと
をも今更捨られしとあひ事してさうく
血をわすれし一糸根を忘る供あふの死
骸を涙する人も人目を怪しうア怪ヨまの
ふま怪するも捨るも風見草町の供

や
家と白首ふ立退くあふり世をを
涙と家とえさう内あれば近お合壁お相
信おのさのさおまはあておふらるる
あれはあふりの物まも知る人あふり
くまふふふ又あふりおれあふり来じゆふ
うまげ刺漆ののりもあふりあふり
人もあふりおれあふり香門の只骨熱傷の涙もむせぶ
うまげ刺漆ののりもあふりあふり

んきり
 言々々香門このやうにぞ様代あつての挨拶ふ武家方と
 おどろけ町寧ふ致ひてその日の夕方様代
 の礼あらがり赤門の御心をもえんと何やら
 来りてお人の記發を見たり消飛で作
 天あり長く一杏門を尋ねるふさぐさ
 まづいよく騒ぎ愕率我憚さるそくお
 の庄司めまが宅へ入り新と告れば庄や
 も大まふ軒を流しこれハ勢いゆすて並

が^んと^や言^ひめを^お連^づく^て代^り官^に之^を訴^ぐは^しめ
 ま^まい^やあ^らむ^さぬ^えか^の好^く人^を相^あ裁^しま^して^は骸^をを^し
 と^{あら}改^めら^るふ^男ハ^後より^切ま^して^一疵^をふ^分め
 あ^まく^又女^ハ背^中ふ^うす^子の^疵ハ^あれ^ども
 自^ら害^の所^にあ^れば^かど^うめ^つて^ふね
 ま^いと^あま^いあ^れば^言め^おその^子細^をを^たづ^ね
 ら^うふ^言め^も香^門が^るを^をり^述く^もや
 守^をめ^めれ^しふ^由或^{せん}と^あら^うより^さそ

しるあれば尋常の沙汰あるものばさず
さうあらば女は家の香門とやうに引連て
来りしとあれば果が女をうふ疑ひあるは
け男といふ女ふ密通が成るまで斬る
捨しものあるたあらばおふ縁をいさう
はあふあるべきを周章てふをいさう
からふ審アらふは後ト眉ふ皺あるに
三十九

の疵をえ分のうへ男のおおせし懐中物
その修是へおまぐと紙金の中までも改
めらふお教多お付あり中ふも用意の老
より依入用拂ひの法をいさうて豊
様沙内苑は二子校と銘ふあるあり
それや依へ芝浦の二城五刑の文をいさう
中ふあるとるの明白ふ分りしより別
え方の修はさうのひさうて代官所より

豊島家おもとて立て通基^{つとむ}やぞお^おい^いふ^ふ
くれ^{くれ}ば^ばど^どい^い家^けあ^あて^ても^もろ^ろ捨^{すて}て^てく^くと^と
ま^まろ^ろく^く一^{いつ}家^けが^が死^し骸^{がい}に^にく^くの^の級^{ぐう}人^{じん}を^を出^で
川^{かわ}村^{むら}ある^{ある}風^{ふう}人^{じん}草^{くさ}町^{まち}で^でま^まき^きさ^され^れる^る

江戸花誌卷二終

